



1998 年 (平成 10 年)

9 月号 (No.640)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150 円

目次

『登山医学』知識の最前線…………… 1

第10回藤木祭を迎えて…………… 3

赤坂謙三君、椎名厚史君の追悼会 4

続素美代会員のエベレスト登頂… 5

海外の山・山頂の酸素ボンベ… 7

報告

マッキンリー気象観測登山隊・ウ
ィンデーコーナー嵐の咆哮… 6

科学委・気象講座…………… 7

百年史委・初期の会員名簿をさが
しています…………… 8

データバンク研・ルームのパーソ
ンで過去の遠征記録も…………… 9

支部だより…………… 10

秋田支部、山梨支部、岐阜支部
さんげんだより…………… 11

わが支部とっておきの一山

東海支部・明神山…………… 12

宮城支部・オボコンベ…………… 12

北海道支部・大雪山御鉢平…………… 13

東西南北

大町山岳博物館で山岳画協会展 14

心の連衆…………… 14

俳句・赤牛岳山行…………… 15

図書紹介…………… 16

寄贈図書、中国雪峰地図受人…………… 18

ネパール国際山岳博物館募金状況 19

新入会員・書籍受人報告…………… 19

会務報告…………… 20

ルーム日誌…………… 21

INFORMATION …………… 22

▶日本山岳会事務取扱時間

月・火・木……………	10~20時
水・金曜日……………	13~20時
ネパール国際山岳博物館募金状況	10月より、第2、第4土曜日……………閉室
新入会員・書籍受人報告……………	第1、第3、第5土曜日……………10~18時
会務報告……………	20
ルーム日誌……………	21
INFORMATION ……………	22
▶図書室開室時間	
日曜・祭日・月曜日を除く毎日……………	13~20時

『登山医学』知識の最前線

中島道郎

『第三回登山と高所環境に関する国際医学会議』と題された国際会議が五月下旬、松本市において開催され、成功裡に幕を閉じた。その会議の様と意義については、先月号に掲載された本会議事務局長・増山茂博士による解説記事によってすでにご承知いただいていると思う。そこで補足的に、この国際会議の話題のなかで会員諸兄にとって参考になりそうなこと、世界の趨勢上『登山医学』は今後どういう方向に進展しているかというところのか、といった視点から論じてみたい。

国際登山医学会 (ISMM) 会長

ベルツ博士は登山医学に関し、基礎医学・臨床医学の発展を通じて登山関連の疾病・障害の治療・予防にいつその寄与を指すと呼びかけた。それはまったくそのとおりで、わが日本登山医学研究会もそれを指しているわけであるが、一般登山家が求めているのはそういう一般論ではなく、実際のな方法論のほずである。その観点から、今回企画された「トレッキングと登山のための実践医学講座」と「シンポジウム・急性高所障害」は非常に参考になったと思われる。そのなかで、これは先

の増山博士の解説にも紹介があった

が、国際山岳連盟 (UIAA) 医療委員会前委員長、オーストリアのベルグホルト博士の「高所順応獲得法」、現委員長、スイスのデュラ博士の「低体温症に対する現場対応策」、スイス・チューリッヒ大学のエルツ博士による「急性高山病の予防と治療」をかいつまんでご紹介しようと思う。

■高所順応

オーストリアのベルグホルト博士が言うには、急性高山病にかからないうで高所順応を獲得するには、以下の三つの原則がある。①順応するまではみだりに動き回らず、あまり速く登らない。②一日の行動高度差をあまり大きくせず、前夜の宿泊地点より三〇〇メートル、個人差を考慮してもせいぜい六〇〇メートル以上高いところには泊まらない。③その

日の最高到達地点にいきなりそのまま泊まらない。いったん宿泊地点より少し上まで登り、そこから再び下へ戻って泊まるのがコツである。

高所順応獲得には三日ないし四日を要するが、いったん獲得した順応は何日くらい持つかというところ、まあ一〜二週間というところではないだろうか。と、ここでこの高所順応という現象が生じるのは高度五三〇〇メートルまでで、それ以上の高所ではいくらずち滞在を重ねてもそれ以上順応は進まず、ただ衰退するばかりである。だから高所登山においては、海拔五三〇〇メートル以上では、高山病を起こさずしかも衰退しないよう前記三原則を援用しつつ、すばやく頂上を極めて下山することを考えるべきである。

これは筆者の感想であるが、この五三〇〇メートルという数字は多分



シシャパンマ峰第4キャンプで斎藤会長と筆者(右)

毎に内服。

に経験的なもので、医学的な意味付けは困難である。しかしどこであれ、エベレストのベースキャンプ同等以上の高所では、いたずらに時間を浪費せず、すばやく頂上を極めて帰ってくるべきだという意見は傾聴に値する。

■高山病の予防と治療

エルツ博士の講義はさらに具体的であった。高度三〇〇〇メートル以上のところでは、一日に稼ぐ高度は三〇〇メートル以下にする。高山病の症状があるのに新しい高度で泊まるとはいけない。ある高度に滞在中に高山病の症状が悪化したら直ちに下山する。

予防・アセタゾラミド(ダイヤモンドックス) 一二五ミリグラム錠一錠、

一日一回ないし二回、または五〇〇ミリグラム徐放錠一錠一回。またはデキサメタゾン(デカドロン)四ミリグラム錠、六時間ないし十二時間

高所肺水腫の予防もそれに準じるが、一度でも高所肺水腫にかかった人はニフェジピン除放錠(アダラートL)二〇ミリグラム、一日三回が予防に有効である。

治療・軽症急性高山病の場合は、安静とアスピリンないしダイヤモンドックスの服用でよいが、重症急性高山病・高所脳浮腫の場合はすぐの下山ないし搬出を考える。

ガモフ・バッグも同様効果がある。デカドロンを併用するとさらによい。高所肺水腫は直ちに下山・搬出に酸素吸入とアダラート一〇(二〇)ミリグラム+アダラートL二〇ミリグラム内服を加える。

もっと緊急事態に陥った場合にはガモフ・バッグにデカドロン+アダ

ラート+ダイヤモンドックスを用いる。

■低体温症

わが国でも、医学的分野で「凍死」はほとんどもう使われなくなったし、低体温症の患者を現場でどう治療するか、などはもはや問題にされなくなってきた。スイスでも同様で、デューラー博士は、だから一分でも速く患者を病院に運び込むために、どここの現場へでも十五分以内に到達できるように、国内八カ所にヘリコプター基地を設け、常時待機しているという国内救急ネットワークの構築について報告した。低体温蘇生の技術は進歩してきているが、それはあくまで病院の施設下でのこと、現場でモタモタせず、蘇生可能ギリギリの時間以内にかにして患者を施設に運び込むかが問題である。その点わが国の現況はお寒い限りである。

■雪崩

雪崩埋没の救助についてもデューラー博士の話は参考になった。すなわち雪崩埋没の死因は窒息であり、三分以内に掘り出された場合はほとんど助かるが、十五分以上たつたらほとんど助からない、という。三分が勝負とはまことに厳しい話である。

■雪中埋没

またそれに関連して興味ある報告があった。展示発表の部であるが、コロラドのハケット博士によれば、一九八五年から一九九五年までの統計上、北米全土のスキー場で十四人のスキーヤーと六人のスノーボーダーが、雪の吹きだまりの壁とか、樹木の根元の穴に頭を突っ込んで死亡している。その直接死因はすべて窒息で低体温ではない。その死亡率は、スキー場における雪崩死亡率の十倍だという。この場合の「率」の意味はよく分からないが、彼が言いたいことは、雪崩だと、それが発生したと同時にまわりのスキーヤーたちがすぐ現場に駆けつけ、遭難者を三分以内に掘り出すことが可能であるのに、この雪中埋没の場合は、誰も気がつかないので助からないのだということである。

そこで彼は、スキー大衆に向かつて、深雪の日には単独で行動しない、少なくとも他人の目の届かない地帯には入り込まない。さらに、もしもスキー場で誰かが滑っていたのに突然見えなくなった、といった光景を目撃したら、それを見過ぎさず、すぐに現場に駆けつけるべきだ、と訴え、そういう世論を広く喚起する必要があると主張している。日本ですういう事故の報告は余り聞いたことがないが、心得ておくべきである。

■国際登山医学専門医認定制度

これはUIAAが進めている計画であり、今回のISMで議論されたわけではないが、実は今回、松本に集まったUIAA医療委員会のメンバーの間でかなり討論され、ほとんどもう詰めの段階まで来た様子である。おそらくこの十一月にオランダで開催のUIAA医療委員会年次会議で正式決定となるであろう。

UIAA加入国の登山関連医師の知識・技術水準を万国共通にある一定水準以上に保たしめんと、万国共通のカリキュラムに基づく研修と試験によって、合格者に「国際登山医学認定医」なる称号を授与しようという動きである。本邦には肩書き・称号が重んじられない風潮があり、筆者はこの制度の本邦定着を危ぶむ者であるが、世界の登山医学をリードしているわが国で、この制度に同調する者が誰もいないとなると、せっかくの世界的な動きに水を差すことになり、いささか心配である。登山者の側から、そういう国際レベルの医師がいて欲しいという要望と、その資格を取った医師を尊重する風潮とが起ってこないことにはほじまらない。まず本委員会諸氏の間からそういう認識が生じてくることを希求してやまない。

第十回藤木祭を迎えて



レリーフ(中央の岩)の前で話す藤木高嶺氏

浅野清彦

。世話人会には百九十名が参加、三百八十一名から寄付金六十七万円が集められている。

このレリーフ像が設置されているところは、六甲登山の中心地ともいえる芦屋谷高座の滝右岸の側壁である。この滝の前を通る道がメインストリートで、ロックガーデンの入り口となっている。高座の滝までは約三分のゆっくりとした登りであるが、滝からは風化した花崗岩の急な尾根をたどることになる。岩登りを楽しむ人たちは滝の上部で左右の谷に入り岩場に向かうし、一般の登山者も谷歩きが楽しめるコースとなっている。

レリーフの下には「RCC発祥の地」と記されている。この小さな広場が藤木祭を催す場所である。はめ込まれている岩は、縦横五メートル四方の一枚岩で、ややハング気味に立っている。レリーフを隠す枝は茶店の人にお願ひして取り除くことはできるが、レリーフの掃除は難しい。上部から懸垂下降してやらなければならぬので、なかなか実現できなかった。

そこで私はレリーフの前でお祭りをしようと考え、まずJAC関西支部の委員会に提案、賛成を得ることができた。さらに大阪、兵庫岳連にも賛同をいただき、三者で実行委員会を発足させることができた。

碑前祭でよく知られているのは、上高地のウエストン祭と、金山平の木暮理太郎氏の碑前祭である。ウエストン祭は上高地の山開きとして定着し、木暮祭はJAC本部の催しから山梨支部の年中行事となり、懇親会の模様は毎年会報に報告されている。藤木祭の場所は宿泊もできないし、狭いし、一般の登山者も加わる日帰りのお祭りである。長く継続する催しにするために、次のような原則を決め、実行することとなった。

- 一、名称は藤木祭とする
- 二、山岳三団体が主催し、芦屋市の後援とする
- 三、開催日は藤木氏の誕生日、九月三十日前後の日曜日とする
- 四、開催時間は登山者の混雑を避け、午後一時から二時までとする
- 五、藤木氏を偲ぶ話を中心に、献歌と献酒で祭ることとする
- 六、開催費用は主催三団体が三万円ずつ拠出し、九万円で実施する

■藤木九三氏のこと

次に藤木氏のことを紹介しなければ

ばならない。氏は一八八七年(明治二十年)生まれ。私が岩登りをはじめたのが一九四一年(昭和十六年)で、彼が書いた「岩登り術」を教本として、毎週ロックガーデンなど、彼が開拓した岩場に通っていた。

「息子藤木高嶺氏の記述によると、藤木氏は京都府福知山の薬種業の五男、八人兄弟の末っ子であった。里帰りの母親に連れられて大江山を何度も往復し、酒呑童子などの昔話を聞き、詩と山に心を惹かれて育った。福知山中学時代、小島烏水の雑誌「文庫」に連載された「槍ヶ岳探検記」で山に取りつかれた。

一九〇七年(明治四十年)早稲田大学予科に入学する。一九〇九年(明治四十二年)二十二歳の時、在学のまま東京毎日新聞社に入社、東京やまと新聞社に転社し、第一次世界大戦に従軍。一九一五年(大正四年)二十八歳の時に朝日新聞社(東京)に移っている。当初は野球記者として活躍したが、翌年東久邇宮のアル



ありし日の藤木九三氏

プス登山に同行、島々から徳本峠を越え上高地までを一日で二往復半し、「宮様登山記」をスクープしたこと、社の内外に山男としての名をあげ、登山記者としての新しい出発をしている。

藤木氏は一九一八年(大正七年)三十一歳の時、大阪本社転勤、間もなく神戸支局長となり、関西地区の山々に親しんでゆく。中でも芦屋のロックガーデンの発見(名付け親)で岩登りに傾倒する。

一九二四年(大正十三年)三十七歳の時RCCを結成し、日本山岳会にも入会(八九三)。日本最初の岩登りの指導書「岩登り術」を刊行したのも、滝谷の初登攀に成功したのも翌年の大正十四年である。またスキーを利用した登山で、乗鞍岳、立山、薬師岳、穂高岳などを次々と登り、神鍋山や氷ノ山を開拓してスキー場を開く基礎を作った。

とくに穂高岳の飛騨側滝谷の初登攀は、大正十四年八月十三日のこと、藤木氏はガイドの松井憲三氏とともに、雄滝の左側から入りアルンゼをつめて大キレットに出た。その同じ日に早大山岳部の小島六郎氏、四谷龍胤氏のパーティーも、雄滝の右側のガリーをつめて濁沢岳鞍部に達している。この二組の滝谷初登攀を競う戦いは、岳人のロマンを駆り

立てた有名な話である。藤木氏が解説に用いたABCなどルンゼの名称は現在もそのまま使用されている。

藤木氏は一九二六年(大正十五年)三十九歳の時、朝日新聞の語学留学生として渡欧し、マッターホルン、ピレネー、ドーフイネアルプス、モンブランなど多くの山に登った。また秩父宮殿下のアルプス登山に随行し、英国の岩場も満喫している。昭和二年に帰国すると、近代登山術の提唱に熱を上げ、登山の指導者として活躍するとともに、「槍、穂高、岩登り」「屋上登攀者」「雪・岩・アルプス」など、多くの著書を出し、先覚者としての役割を果たした。

昭和六年には樺太の突岨山に登り、八年には満蒙学術調査団熱河探検に参加、九年には京大の冬期白頭山遠征にも行っている。

氏の山岳会への功績は、戦中戦後へと続き、戦中では戦技登山研究、戦後では南極観測隊、ヒマラヤ遠征隊などへの指導、援助などが数えられる。

■いつまでも楽しい藤木祭を

藤木祭は年々盛り上がり、恒例の行事として定着しつつあるが、藤木氏を知る人は少なくなり、偲ぶ話が聞けなくなっている。第三回からは地元のコラス団が参加、第四回か

らは藤木祭と染め抜かれた職が道路や会場にはためいている。今回の第十回は記念品として日本手拭いが参加者に配布されることになっている。しかし藤木祭を創設したわれわれはこれからも楽しい祭りとして続けられるか心配であるが、後輩の岳人を信じ、託して行く努力をすべきだと考えている。

赤坂謙三君 椎名厚史君の追悼会

日本山岳会青年部が期待を込めて派遣したカンチェンジュンガ登山隊は登頂成功後、赤坂謙三、椎名厚史両隊員を遭難で亡くした。両隊員は世界第二の高峰K2の登頂者であり、将来を嘱望された登山家であった。

その両隊員の追悼会が、七月十一日、十一時より、東京四谷スクワール麴町で開催された。赤坂、椎名両家はもとより、日本山岳会、千葉大学、早稲田大学の関係者百九十五名が参集した。

第一部の報告会は宇田川芳伸青年部担当理事が司会を務め、一分間の黙禱のあと、斎藤惇生会長、西村政晃千葉大学山岳部OB、竹田寛次早稲田大学山岳部OBの挨拶があった。谷川太郎隊長の登山と遭難の経緯報



挨拶する斎藤会長

告のあと、若干の質疑応答がなされた。

第二部の追悼会は、絹川祥夫総務担当理事の司会で、両隊員への献花のあと大森薫雄副会長が統括責任者として挨拶に立った。そして谷川太郎隊長、亀山哲千葉大学山岳部OB、藤井陽太郎早稲田大学山岳部OBの弔辞へと進み、吉永英明常務理事の献杯発声のもと、精進落としての会食へと進んでいった。山本篤K2登山隊隊長と松原尚之ダウラギリ峰登山隊隊長からも、仲間ならではの思いが語られた。

締めくくりは赤坂家を代表して父鉄四郎さん、椎名家を代表して兄隆文さんの挨拶があり、閉会となった。

(村井 葵)

統素美代会員の エベレスト登頂報告会

統素美代会員(三十歳)のエベレスト登頂報告祝賀会が、七月二十四日、高輪プリンスホテルで開かれた。ラッセル・ブライス(ニュージールランド人)の公募隊に参加、五月二十五日十三時三十分、念願のエベレストに中国側の北稜ルートから登頂した。七五年の田部井淳子、九六年の難波康子に次ぐ日本人女性三人目、世界では四十三人目の女性登頂者となった。

統会員は登頂後、六五〇〇メートルの前進キャンプから、パソコンに電子カメラの画像を入力、衛星電話(インマルサット)を利用したEメールで、登頂写真の電送に成功した。登頂者自身がインターネットを通じて直接マスコミとコンタクトするのも、ハイテク時代を象徴する新しい試みとして注目された。

彼女は通訳、コーディネーターで、



最高の瞬間、と語る統会員

山登りはまったくの素人といっている。初めて山に接したのが九〇年ドイツ隊エベレストのベースキャンプ・マネージャーとしてだった。この時七〇〇メートル地点に登ってしまった。九五年末踏の北東稜から挑んだ日本大学隊に、NHKの取材チームとして参加、六三〇〇メートルのABCまで登った。九六年春、IMAX(大型映像映画)登山隊に招かれて登頂隊員として参加、難波康子の事故などもあり、七九五〇メートルのサウス・コルまでしか登らせてもらえず悔しい思いをした。九七年公募隊で再びエベレストへ。この時は調子が悪く八四〇〇メートルが

最高到達点だった。エベレストの頂上に立つまでに、チャー・オユーに無酸素で二度登頂、モンブランにも登っている。背が高く、贅肉を削ぎ落としたカモシカのような肢体と好奇心に満ちた瞳が印象的だった。「ベースキャンプに帰ってエベレストの頂上を仰ぎ見た時、ああ、あそこに登ったんだと、その時が、私の生涯でもっとも素晴らしい瞬間でした。次は宇宙に行きたい」
BGMに合わせてスライドを見せながら、統会員は次なる夢を語ってエキサイティングな報告を締めくくった。司会・神崎忠男監事。出席者百五名。(村井 葵)

スズメ、セミ、クラゲ、ヒガンバナ……。一緒に遊んでもらった動植物へのオマージュ。

串田孫一文／辻まこと・画

わたしの博物誌

稀代のモラリストと登山家でもあった自由人の二人が、失われゆく自然への深い思いを込めて作り出した伝説的画文集。時を超えていまオリジナル原寸で初の刊行。¥8500(税別)

日本アルプス

宮下啓三 日本の山をアルプスという意味は？ウェストンから三島由紀夫まで、その歴史と魅力を分析した山岳文化史。 ¥2500(税別)

みすず書房

〒113-0033 東京都文京区本郷5-32-21
tel. 3814-0131 fax. 3818-6435

報告

REPORT
9月

マッキンリー気象観測・前編

ウィンデーコーナー、嵐の咆哮

第九次登山隊長 大蔵喜福

雨のタルキートナで二日間フライ
ト待ちをした。今年は入山を十日ほ



今年のマッキンリーは悪天が続いた

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

ど早めたが、春の不安定な気候は五月一杯まで長引いていた。古い友人となったレンジャーのロジャーは「悪天続きでマッキンリーの登頂率は二割」と言ったが、すぐ「お前さんがくると天気はよくなる」と笑顔を向けた。

六月二日、行動初日、カヒルトナ氷河の二二三〇メートル地点へ、久しぶりに一日晴れた。氷河をはさむ山稜からは不気味な轟音を響かせて、大規模な雪崩がいくつも落ちた。早めにキャンプを設置し、疲れを癒す。一〇ポンドのステークを平らげる隊員たちを見て安堵したが、マッキンリー頂稜は幾重にも重なった不気味な笠雲に覆われ気が重い。五二〇〇メートル地点で女性が滑落し、死亡したと聞いた。

翌日、不安定な天気の中、三三五〇メートルのデポキャンプへ移動。六月四日、雲行きが悪く午後一時

まで停滞。メデイカルキャンプ(B C)への荷揚げを、順化を兼ねウインデーコーナーの荷揚げに変更する。デポに戻ると頭痛の隊員が続出した。それでも食欲が落ちないのは若さ故か。三十代の日隊員だけが食欲がない。三九・四度の熱に驚く。水分不足で熱中症にかかった。意外と怖い患いなので介護に休む暇もない。

不安定な天候は停滞を続けさせる要因だが、お天気が悪いといって休んでいては登頂はおぼつかない。現に時間切れで止むなく下っていく。パーティーを何組も見ている。

行動四日目はB C(四三三〇メートル)への移動日。悪天でも行動することを前日に指示しておいたので、皆の顔は一樣に引き締まっていた。

朝から風雪、気温マイナス〇度C、風は毎秒三〇メートル前後。あまりの烈風に高度差三〇〇メートルほど登った凹地でビバーク態勢に入る。六人用のテントをどうにか立て、全員を押し込む。何しろテントが潰されそう。物凄い風と寒さを、膝を抱えバカ話でやり過ごす。ようやく発つ気になったのは風が緩んだ五時間後だった。

収まったとはいえウインデーコーナーでは、激流を一步行くが如くで息苦しさや強烈な寒気が襲う。形容しようのない烈風は、若い隊員たち

には凄い体験であろう。とにかく誰も飛ばされずに午後九時、無事B Cに着いた時はホッとした。脱力感がテント場をおそった。

六月六日、行動五日目、強風雪で午後二時まで停滞。初めての休養日としたかったが、ウインデーコーナーのデポ回収に向かうことにする。Hは調子が戻らず休む。Mは頭痛がひどいから休ませようと考えたが、順化のために行きたいというので同行を許す。吹雪荒れる中、氷河を下りウインデーコーナーへ。風は昨日より強い秒速四〇メートルを超えている。そんな中、傾斜の強い氷面のトラバースを強いられる。気を抜くと命の保証はない、そして相棒も巻き込む。

調子が戻らないHとMを思うにつけ、この悪天を恨む。絶対高度だけでなく、台風並の気圧の変化が高度障害を助長させるからだ。

Mは寒気と烈風に立ち向かう気力も失せてただ座り込むだけ。帰路を考えると連れて降りたことを後悔した。

全員を叱咤し、吠える風に怒鳴りまくり、荷造りを急ぐよう指図し、悪魔の咆哮からどう抜け出すかばかりを考える。一〇キロほどの荷のソリが私の腰を吊り上げ、嵐のように舞った。耐風姿勢は絶対に崩せない。

自分の体重ほどの荷を担ぐことになつてしまったE隊員は、口から泡を吹きつつ、あらん限りの力を出しきって抜けた。精神力だけ、限界を超えて立っているといった九人の抜け殻がBCにそろつたのは、午後七時だった。

全員の体調をそろえるために、その後二日間を休養に充てた。幸い降雪が続き得をした気になった。だが、N、MそしてAも不調を訴えた。半数の隊員が調子を落とした中で、元気のよいI隊員が、徐々に重度の高度障害に陥っていたのを私は知る由もなかった。

科学委員会・気象講座

夏山気象入門

七月十六日十八時三十分～二十時十分、日本気象協会の奥山巖氏(本会会員)の「夏山気象入門」講座がルームで開かれた。その要旨を報告する。出席者二十七名。

梅雨 梅雨ははじめは本州南岸沿いに停滞し、北側はオホーツク海高気圧のため低温、ぐずつき型となる。

後半には、前線は西日本では北上東日本はまだ南岸沿いにあるが時々北上する。北上すると高温多湿の空気が入り雨も多い。

関東地方は北東の冷たい空気が入

海外の山

山頂の酸素ボンベはいかが

江本嘉伸

なにかとエコロジーが問題になるヒマラヤ。中でもエベレストのサウスコルの放置ボンベほど気になるものはない。延べ登頂者が千人を超えた今も、公募隊の発達で毎年二、三百人という登山者が、酸素の助けを借りて挑戦するのだから、大変だ。

そんな中、「使用済み酸素ボンベ買ってくれませんか?」という、新しい「環境登山」の試みと、その行方が注目されている。

ポップ・ホフマンを隊長とするアメリカの登山隊「エベレスト環境登山隊'98」。八千メートルに転がっているボンベを一般に記念品として売り出し、クリーン作戦の資金にしようというアイデアである。

サウスコルには六百から千の使用済みボンベが捨てられたままになっている。「そのカラのボンベを下ろすから、あなたも一本分スポンサーになってくれませんか?」

値段は送料含め一本百五十六ドル(約二万二千円)、はじめに六十ドル払い、残額は手元に届いてからよろ

しく、というふれこみだった。専門のシェルパたちも特別に雇用した。「エベレスト環境登山隊」という名は、これまでも各国で使われてきたが、酸素ボンベの買い手を募ってクリーン作戦を実行したのは、これが初めてだろう。

サウスコルにころがっている酸素ボンベの多くは頂上までいったものだ、という。確かに、ちょっとした記念品、あるいは「骨董品」の価値はある。雪の世界最高地点をしのんで、頂上から届けられた「証明タグ」つきの栄光のボンベをサカナにビールなど飲むのもいいではないか。

インターネットを通じてボンベ購入希望者を募った隊の成果は上出来だった。隊のウェブサイト(<http://www. Everest98.com/>)には「倉庫室」があり、希望者はここから祈禱の旗や現地の石や隊のTシャツ、帽子などと同様、酸素ボンベを注文できる仕組みで、反響はよかった。

無論登山がこの隊の目的だ。こちらのほうは、他の隊の滑落事故を含めいくつもの事故に遭遇したものの、五月二十日、十一人の登山隊員のうち五人が七人のシェルパとともに登頂に成功した。

環境保全にも細心の注意を払い、三二五キロの可燃ゴミ、二〇〇キロの分解可能な不燃ゴミ、カン類一〇一キロ、壘類二〇六キロを集めた。

注目の使用済み酸素ボンベも、シェルパたちの活躍で二本を下ろすことができた。彼らはもちろん、一本につき相応の報酬を得た。

ボンベは、八月、タイのバンコクまで運ばれ、いよいよ船積みするまでになった。しかし、そこで問題が起きた。ボンベが入っていたコンテナの中で火災が発生したのだ。

原因不明だったため、ボンベも疑われた。船出はストップされ、エベレストの環境浄化が目的の試みは予想外の展開に捲きこまれた。

ついには「希望される方には前金をお返しします」と表明するまでに追いこまれたが、山々の環境を守ろうとする登山家たちを、神も見捨てはしなかった。

八月三十一日付の「倉庫情報」では「酸素ボンベ購入者の皆様へ緊急連絡!」との表題でコンテナ内部の写真を見た責任者が「ボンベはほぼ無傷です!」と朗報を伝えている。このアイデアについて、「シェルパが本来の仕事を忘れ、ボンベ下ろしに夢中になるのが心配」との声も出ているが、鉄ゴミがさらにふえることを考えれば、それもひとつの選択だろう。

最高峰から大いなるエネルギーをかけて下ろされたボンベ、海を渡って市民スポンサーの手に届く日は近い。

り、低い雲に覆われることがある。雲頂は低いので高い山の上は快晴である。山の風下のある山梨県は天気は割合よい。中ア、南アなどは雲に包まれてわか雨が降るが、関東内陸は降りにくい。

夏型 梅雨明けには前線が北上し、太平洋高気圧が西日本から張り出して順次東へ広がる型と、前線が南下して北の冷たい高気圧が南下し、はじめは割合涼しい型とがある。梅雨明け十日といわれるように、梅雨明け後の一週間は夏型が続く。この太平洋高気圧にスッポリ覆われる期間が夏山シーズン。登山に絶好の時である。

台風 台風は、海面水温二七度C以上の海域で発生発達する。太平洋高気圧がしっかりしている時はその周辺に沿って動くが、高気圧が弱かったり分裂していたりすると迷走型となる。風は低気圧では上空ほど強いが、台風では大体一〇〇メートル前後がもっとも強い。

台風が近づいて北から北東の風が次第に強まる時は台風は自分のいる山へ近づいているか、その南方を北東進、北↓南↓南西↓北西へと変化する時は、山の西から北側に向かって北東進している。南↓南西風となるにつれて風はもっとも強くなる。上陸すると風は弱まるが、熱帯気団

の水蒸気が山の南側斜面で地形上昇を起こすので、南斜面を中心に大雨となる。

雷雨 雷は上層寒気の南下、下層暖気の北上、または両者が重なったような大気が不安定な時に起こる。

山の朝、空気が異常に澄んでいる時がある。これは上層に寒気があり朝のうちは寒気が沈降しているため、午後には雷が起こりやすい。日が昇るにつれてガスが吹き上がり、昼ごろには山頂は積雲や積乱雲の中となる。

午後遅くから宵のうちが雷が起こりやすい(夕立型、熱雷)が、寒冷前線の通過や寒気を伴った気圧の谷の通過では夜でも明け方でも起こる(前線通過型、界雷)。寒冷前線通過型では前線の動きからある程度時刻を予想できるし、時間も割合短時間である。

強い上層寒気を持った上層寒気渦、上層の気圧の谷接近の時は、積乱雲が群れをなし雷が続くことがある。

雷雲は上昇気流の起こりやすい山岳部でまず発生し、上層風に乗って風下へ降りてくる。風の弱い時、関東では、秩父↓荒川沿い、群馬↓利根川沿い、栃木↓茨城のように地形的障害の少ないところへと動く。

雷三日といわれるように前日雷があったら、今日も、あるいは明日も

あると考えたほうがよい。**秋型** 前線が南下し停滞するようになると、一挙に秋となる。台風は本州南海上を北東進しやすくなり、低気圧も発達する。天気も短く周期変化する。(平野 彰)

百年史委員会

初期の会員名簿をさがしています

現在当委員会では、百年史編集のため、様々な角度から資料を収集中です。その一環として、過去に発行された会員名簿を集めて、会員の変遷を展望してみたいと考えています。創立直後の頃の名簿がなく困っています。

創立後二十年くらいの間は会員数も少なかったためか、「山岳」の付録として別刷りし、会員のみに配布していました。

昭和二十年五月に虎ノ門のルームが戦災に遭う前は、ルームにあったと思われる。戦後は補充を心がけていたものの、この種の名簿は新しいものが出ると更新してしまいうためか、なかなか集まりません。

つきましては会員各位の中で、下記の名簿をお持ちの方は是非ご提供いただきたいと思います。拝借しこ

ピーさせていただくことでも構いません。ご協力をお願いいたします。ご提供願いたい会員名簿

- 「山岳」第三年第一号付録(明治四十一年)
 - 「山岳」第四年第一号付録(明治四十二年)
 - 「山岳」第五年第一号付録(明治四十三年)
 - 「山岳」第六年第一号付録(明治四十四年)
 - 「山岳」第七年第一号付録(明治四十五年)
 - 「山岳」第八年第一号付録(大正二年)
 - 「山岳」第九年第一号付録(大正三年)
 - 「山岳」第一〇号第一号付録(大正四年)
 - 「山岳」第二年第一号付録(大正六年)
 - 「山岳」第四年第二号付録(大正八年)
 - 「山岳」第五号第二号付録(大正九年)
 - 「山岳」第一八号第二号付録(大正十二年)
- なお「山岳」の付録として発行された会員名簿は、第二六年第三号(昭和六年十二月発行)をもって終わり、以後は「会員名簿」として単独で発行されています。

昭和七年度より終戦までの間に発行された会員名簿のうち、本会事務局には昭和十、十一、十四、十六、十七年度版は保管されていますが、会員各位の中でこれ以外の会員名簿をお持ちの方がありましたら、こちらのほうも是非ご提供いただければ幸いです。
(松田雄一)

データバンク研究会

ルームのパソコンで過去の遠征記録も

昨年十二月にホームページを開設して早や八ヶ月が過ぎ、アクセス件数も八千件を超えました。

また八月には、本部のロビーに会員の皆さんが自由に扱えるパソコンが設置され、実際にホームページの内容を見ることができるようになりました。ロビーに設置したパソコンを使い、これからどんなデータを準備し、掲載していくかについて、いくつかを紹介してみたいと思います。まず、過去のJAC関連の遠征記録一覧を作っています。これはおい

おい、ホームページ上に掲載していきます。手始めに一九九一年から一九九七年版の「山岳」に掲載されている遠征記録より一覧を作っています。すでにこの会報をご覧になる頃

には、この七年間の遠征記録の半分程度の記録一覧がホームページに掲載されています。

最初にこの七年を対象に選んだ理由は、「山岳」のデータがデジタル情報としてフロッピーディスクの形で入手できたからです。一九九〇年以前については、「山岳」を見ながら、要約しつつ、入力していくことになりま

す。デジタルデータとして入手できない情報を入力するための道具としてスキャナーという機械も準備しました。「印刷物として記録する」と「ホームページに掲載すること」で記録したことにする」といった二種類の記録に、これからはJACも直面していくことになりま

す。遠征記録は過去のものだけでなく、遠征中の記録についても、連絡がある限り掲載していくことができます。これから遠征に行かれる隊長やリーダーの方より、いろいろな情報をデータバンク研究会へ提供していただければ、可能な範囲でホームページへ掲載します。

準備するデータの二番目として、JACが保有する図書一覧をロビーのパソコンで見ることができるようになりました。図書委員会の協力でJAC保有図書中、一九八六〜一九九七年に図書委員会を受け入れた図

書一覧です。受け入れ年度ごとに「著者名」「書名」「図書番号」順に検索することが出来ます。

現在保有する図書の約半分が検索できます。一九八五年以前の図書についても近々データを準備する予定です。図書は毎年増加していくため、定期的にデータを更新していくことになりま

す。データの三番目として資料委員会で管理している資料一覧を見ることが出来るようになりました。資料委員会が過去整理してきたデータを公開するものです。現在、分類および整理が完了している資料約千点のデータです。この資料には、外部の博

物館などに寄託されていたり、高地の山岳研究所に保管されていたり、現物を見ることができないものが多くあります。デジタルカメラで写真を撮り、資料一覧といっしょに見ることが出来るようにしていく予定です。

ご紹介した内容は本部ロビーのパソコンで確認できます。また、要約した内容でホームページにも掲載していきます。内容について会員の皆さんのご意見、ご提案などありましたら、是非左記へご連絡ください。連絡先：データバンク研究会

Eメール:jac-info@mx5.nisq.net (三上博民)

●新ハイキング選書●

●第20巻好評発売中●

一等三角点の山々

山口ゆき子/横山 隆/高柳生雄/川越はじめ/
岡村美邦共著

A5版・310頁・定価1680円(税込)掲載の山 80山

新ハイキング社の一等三角点の山シリーズの三部作「一等三角点の名山100」「一等三角点の名山と秘境」「一等三角点の山々」も発売中

※3冊とも山は重複していません

●日本山岳会選定●話題の本●8刷増刷

日本300名山ガイド

〈東日本編〉〈西日本編〉

市川静子、岡田敏夫、岡部紀正 A5版・320頁

川越はじめ、廣澤和嘉 共著 定価各1680円(税込)

※著者はすべて日本山岳会会員です

新ハイキング社 東京都北区滝野川 7-6-13

☎(03)3915-8110 振替 00130-9-146915

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況をレポートします。

秋田支部

戸来岳(大駒ガ岳・三ツ岳)へ

秋田市から車で一九〇キロ、キリストの渡来地といわれている青森県三戸郡新郷村。大駒ガ岳と三ツ岳の二つを合わせて戸来岳(へらいだけ)と呼んでいる。この山へ、梅雨の明けぬ七月五日、支部山行を実施した。参加者は会員二十二名、会員外三十名の大部隊となった。

登山口では恒例(?)の、岡田支部長から入山許可証・バナナの差し入れが分配された。

登山道入り口付近からの大駒ガ岳(二一四メートル)は、頭を雲の中に隠している。そして、熊笹の中にエゾアジサイを配置してわれわれ

を歓迎していた。緩やかなブナ林の傾斜から階段状の急な傾斜へと続く。ダケカンバの大木は、冬の強烈な風雪に耐えて曲がりくねり、武者姿の「ねぶた」を思わせる。風は汗をかいた肌に心地よいほどに吹き、大駒ガ岳に立つ。

ここから鞍部に一気に下るが、ガスが立ち込め、思ったより遠く感じられた。灌木帯の山道は整備され、歩きやすい。一等三角点のある三ツ岳(二二五九メートル)に着いた頃には、ガスの合間から十和田湖が眼下に広がる。各自の美酒で乾杯。十和田山、十和利山などの山々を眺めながら、しばし岳友との懇親を深めた。



戸来岳山頂に勢ぞろいした52名の参加者たち

下山後、キリストの墓を見学し、三々五々家路へ向かった。

(柳田勇悦)

山梨支部

第三十七回木暮理太郎翁 碑前祭を開催

標記の会を五月二十三、二十四日、山梨県金山平において開いた。夕刻ゆかりの宿、有井館に参集した者二十六名、例年の半数である。このくらいだとこぢんまりしているものだ。

まずは、何があってもイワナの骨酒。堀口丈夫会員が釣りも釣ったり、百尾以上。ゆっくりと遠火で仕上げた熱燗味の絶品、お燗をつけるのが間に合わない。その間、宿の心尽くしの山菜料理、そばなどを賞味。

木暮翁が亡くなってすでに五十四年も経っているので、翁をご存知の会員は十指を数えるほどになってしまった。今年には神谷恭平氏から、記念講話をいただく。中学生の頃、父君(神谷恭氏)と訪れたことを話された。

二次会は、前庭で大きな火を囲んでしばし清談の時を持った。

明ければ小雨、レリーフの前でささやかな碑前祭の集まりを行う。記念山行は、甲府市北郊の興因寺山を

予定していたが、雨天で変更。折しも開催中の「足立源一郎山岳画回顧展」を鑑賞することに決定。足立画伯は土曜会の生みの親のお一人であり、木暮碑前祭へもしばしばおいでくださった(没後二十五年)。

中央道須玉ICから一宮ICを経て御坂トンネルを抜け、河口湖畔まで長駆車を飛ばす。小雨の煙る中、河口湖美術館(館長は足立先生のご長男足立朗氏)五百点を超える水彩、クロッキー、画帳と、一巡するだけで一時間を超えてしまう。

昼食は恒例のヒヤムギ、特別に喫煙室を開放していただき、車座になってまた大宴会を開き暮。

本年も各地より珍味、銘酒などたくさん差し入れをいただく。ご厚情のほど心からお礼申し上げる次第である。ちなみに本年使用の酒は、八ヶ岳の麓、小さな酒屋の「谷桜」であった。なお記念品は島根県出西の焼き締めグイノミ。

最後に若干のお願いを書く。JACの年中行事がいくつかある。長い歴史のあるものは、六月第一週末のウエストン祭の五十三回。有志閑談会の四十回、それに続くのが三十七回を数える金山の木暮翁碑前祭である。

なぜ、五月の第四週末に行くかというと、五月は第三代JAC会長木

さんけんだより
新米管理人奮闘記・3
山研の隣人たち

木村太郎

ある朝、目覚めると山研に思いがけず可愛いお客さまが訪れていた。十数頭の猿たちである。テラスの木の椅子に座り、居酒屋で一杯やっているかのよう、テーブルを囲んでいる。集会室(食堂)のガラス窓に顔をくっつけて室内を覗いているのもいて、その鼻息でガラスが曇っている。近づいても逃げようとせず、逆に品定めするかのようじろつとこちらを見る。なんだかこちらが檻の中の猿になった気分だ。

芽吹きの時季、山にはまだ新芽が
研究の魁であった木暮翁を偲ぶ会である。まさか六月のウエストン祭と日と同じくして山岳会の行事はしないであろう。それは旧師に対する最低の礼儀というものだと思ふ。同好会などでは、それぞれの事情もあるだろうが、五月の第四週末は、

暮理太郎氏のお立ち見の月だからである。
山登りというのは、先人の後をたどり、先人の肩に乗り、それを越えて行くものである。先人は何時になっても師である。木暮碑前祭は、奥秩父の父といわれ、日本のヒマラヤ

ないせいか、ほとんど毎日、彼らは山研に寄ってくれた。しかし夏休みを迎える前頃から、姿を見せなくなってしまった。
その他の訪問者はたくさん種類の小鳥、めったにはきてくれないりस्ताちだ。カモシカもいるらしいが、お目にかかっていない。そして最近山研に住み込んでいるのは私たちだけではないことに気づいた。テラス側の雨戸収納スペースに、ヘビが住んでいるらしい。陽気がいいと、大きな青大将がテラスに出て日光浴をしている。

岐阜支部

日永岳・春季山行

(山村正光)

三十七回も続いてきた木暮碑前祭の日であることを頭の隅に入れて計画を立てられたい。最近、若葉会山行ジャック何がしの集会在同日行われているようだ。妄言多謝。

今年四月から雨が多く、五月も梅雨入り状態が続く。
五月十七日、夜来の雨は朝方小雨となり、降水確率二〇パーセントの予報に、意を決して美山町役場へと走る。精鋭十四名が集合し、四台の車に分乗して八時に役場を出発した。神崎川を北上し、最奥の地区仲越分校跡に駐車し、身支度する。

霧雨にカッパの人、傘をさす人、それぞれに準備を整えて、八時四十分、ガッパ谷林道を歩き出す。未舗装だが、幅は広く四輪駆動車なら入れそう。水量は多いが濁りのない清流に、タニウツギが満開の枝をさしかけ、ホウヤトチの白い花も樹上に点々と美しい。五十分で林道の終点となり、頂上との標高差は四八〇メートルと見当をつける。

小さな沢を渡り、杉の植林帯をジグザグに登る。雨はほぼ止んだが蒸し暑く、汗でシャツがじっとり濡れる。樹林帯に入っても道はよく整備されていて、危ないところにはロープがフィックスしてあり、藪こぎの必要もない。十時五十分板取村との境界線上の西ヶ洞乗越に出た。

一休みの後、左に折れて急登が始まる。尾根伝いにヒノキやマキの巨木が連なり、濡れた根の上を滑らないよう慎重に登る。暗い樹間にイワカガミがピンク色に群生し、ドウダンツツジやウラボシも目につく。シャクナゲも多いが、今年の花は早く咲き、既に散り果てていた。突然、目の前に大きな反射板が現れる。登山道がよく整備され、金属製のはしごが何か所かあったのも、この反射板の保守のためであったようだ。頂上はその三〇メートル先だ。十一時二十分、標高一二二五メートルの日永岳頂上に登った。十四人が座るには快適な広さだが、やはり視界はきかない。それでも初夏の山頂は心地よく、あちらに能郷白山が、こちらに屏風山が見えるはず、などと語り合っけ昼食をとった。

下山をはじめて間もなく、一瞬の日差しを受けて林の中が急に明るくなった。緑樹が生き生きと躍動し、薄暗さに慣れた目を驚かせた。十五時、仲越分校跡へ帰着し、散会した。
(久野菊子)



当欄についてご意見、ご感想、またおもしろいアイデアなどがありましたら、お寄せください。
総務部

東海支部

奥三河の峻峰、大明神 明神山

愛知県東部の山域を奥三河という。長野県に接する北設楽と南設楽の両郡をあわせての通称奥三河に明神山は二峰ある。東栄町本郷に近い三ツ瀬明神山(一〇一六メートル)と、その北の平山明神山(九七〇メートル)で、三ツ瀬明神山を大明神、平山明神山を小明神と呼ぶ。人氣は大明神のほうで、峻峻な山容、風格からも奥三河の一番人気である。ホソバシヤクナゲの咲く五月の登山をお薦めしたい。

ルートは国道一五一号線、三ツ瀬口から入り、三ツ瀬峠を経て登るのが一般ルート。ほかに柿野集落より尾籠岩山(オロウイワ)の麓からの北ルート。JR三河川合駅から乳岩(チイワ)ルートに登る南ルートがある。南ルートは、やや長いので三ツ瀬口から登り、帰路に乳岩ルートをとるのがよい。

1	コースタイム	明神山、三ツ瀬口登山口-90分-六合目の分岐-60分-明神山頂-40分-六合目の分岐-120分-乳岩(チイワ)登山口-40分-JR三河川合駅
2	記 録	『名古屋からの山なみ』および『名古屋周辺・続山旅徹底ガイド・裏木曾/東濃/奥三河』どちらも当会東海支部編
3	地 図	国土地理院(25,000/1地形図)三河本郷 国土地理院(200,000/1地勢図)豊橋
4	交 通	JR東海道線豊橋駅より-飯田線90分-JR東栄駅-タクシー20分-三ツ瀬口の登山口帰路・JR三河川合駅より-飯田線80分-JR東海道線豊橋駅
5	付近の観光地	鳳来寺 鳳来寺山 山びこの丘ブッポウソウ ウォール(人工クライミングウォール=JR飯田線本長篠駅下車・バス20分) 湯谷温泉(JR飯田線・湯谷温泉駅下車) 天文観測の絶好地、スターフォレスト御園(電話・0536-7-6-0501)東栄町観光協会
6	そ の 他	奥三河の「花まつり」は昭和51年に国の重要無形民俗文化財に指定された700余年の伝統を誇る祭りで、南信地区から奥三河にわたる天竜川水系のみに現存する、神人和合を思わせる奇祭。民俗学者・柳田国男や折口信夫らの目を釘付けにしたという。
7	参 考 図 書	日本山岳会東海支部編『名古屋からの山なみ』(中日新聞社・1991年刊) 日本山岳会東海支部編『名古屋周辺・続山旅徹底ガイド・裏木曾/東濃/奥三河』(中日新聞社・1996年刊)
8	問 い 合 わ せ	長坂博(会員番号8803) 鈴木常夫(会員番号6914)

宮城支部

小さくも天を突く 宮城の槍ヶ岳 オボコンベ

二口・笹谷の東、桐ノ目山と三森山の間に、異様な山がそびえている。オボコンベである。この山だけが、どうしたわけか天を突くように大地からニョキッとそびだっている。柱状の見事な突起、それがオボコンベだ。私たちの宮城では、一番尖った山だが、こんな山はほかでも見たことがない。おそらく古い時代の火山岩頸であろうが、まだよく調査されていない。

名前もユニークである。「子供をおんぶした」という意のオボコーオンブをとる三原良吉先生説と、アイヌ語の「槍の山」を意味するオプーコンベをとる著者説が有力である。オボコンベの西側には小さな岩峰が連なっているが、そこには私たちがマンモス岩と呼んでいる石橋がある。オボコンベには道がないが、周囲の滑沢がその役割を担っているのも楽しい。

1	コースタイム	A地点-50分-B地点-40分-C地点-20分-頂上-15分-C地点-25分-D地点-30分-E地点
2	記 録	オボコンベ登山案内参照
3	地 図	国土地理院 (25,000/1地形図) 今宿 作並 今宿の右上 711m峰と三森山のほぼ中央、詳細な地図にも「オボコンベ」の記載なし
4	交 通	J R仙台駅-バス1時間-本砂金(所夫)-1時間-栃原-20分-登山口 マイカーは東北道「仙台南インター」から秋保方面、長袋から本砂金に至り、バス停「所夫」を右折して栃原を通り登山口A地点まで車を入れられる。駐車スペースあり
5	付近の観光地	二口溪谷 磐司岩 秋保大滝 大東岳 みちのく杜の湖畔公園 秋保温泉 セントメリースキー場
6	そ の 他	秋保温泉内に大衆浴場あり
7	参 考 図 書	柴崎徹著『宮城の名山』オボコンベの項、他
8	問 い 合 わ せ	柴崎徹(会員番号7018) 三宅泰(会員番号10060)

北海道支部

大雪山への誘い

大雪山御鉢平めぐり

「富士山に登って山岳の高さを語れ、大雪山に登って、山岳の大きさを語れ」。これは文人・大町桂月が、まだ登山道のなかった大正十年八月に、草鞋ばかりでリュックを背負い、杖をついて登り、その紀行を『中央公論』に発表したものである。

この大雪山のスケールの大きさを実感するには、峰頂部の大噴火口(御鉢平)めぐりをお薦めする。健脚で日程に余裕があるなら、そこからさらに様々な変化に富んだ縦走コースをたどることができる。旭岳温泉から姿見の池に通じている旭岳ロープウェイは老朽化したので、来秋から運休し、改修工事が予定されている。そこで層雲峡ロープウェイから容易に登れるコースを紹介し、そこから思い思いのコースを満喫していただきたい。

1	コースタイム	黒岳リフト-70分-黒岳頂上-20分-黒岳石室-100分-北鎮岳分岐-30分-中岳分岐-40分-間宮岳-50分-北海岳-70分-黒岳石室-30分-黒岳頂上-50分-黒岳リフト
2	記 録	
3	地 図	国土地理院 (25,000/1地形図) 層雲峡、愛山溪温泉、白雲岳
4	交 通	J R旭川駅または上川駅からバスが層雲峡温泉まで運行 道北バス TEL: 0166-23-4161
5	付近の観光地	層雲峡温泉、大函・小函、愛山溪温泉、大雪高原温泉
6	そ の 他	大雪山御鉢平からたどれる縦走コースに、愛山溪温泉、旭岳温泉、大雪温泉高原、銀泉台がある。さらにトムラウシ山や十勝岳連峰に縦走することができる。
7	参 考 図 書	『ATTACK大雪山(ヌタクカムウシュペ)』監修・旭川山岳会 25,000/1地図、ガイド冊子つき、北海道地図帳 梅沢俊他編『北海道夏山ガイド②中央高地の山やま(上)』北海道新聞社 三和裕佑編著『とっておき北海道の山』東京新聞出版局
8	問 い 合 わ せ	高澤光雄(会員番号5308)

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき二〇〇字詰原稿用紙五〜六枚でお願いします)



イラスト 野田四郎

大町山岳博物館で 第四回日本山岳画協会展

岡澤祐吉



大町山岳博物館前で出展者たち

長野県の大町山岳博物館で、去る七月十八日、第四回日本山岳画協会展のオープニング・セレモニーがあった。梅雨の晴間の強い日差しの中でのオープニングだったが、例年なら鹿島槍や爺ヶ岳、蓮華岳など残雪を置いた西の山々が見えるのに、今夏は気候不順のせいか雲に隠れて見えず、わずか烏帽子岳の頭だけが雲の切れ目から望まれた。

日本山岳画協会幹事で、本会の会員でもある関戸紹作画伯の挨拶なかで、現在の協会員数は十六名だと聞いたが、創立会員の足立源一郎、茨木猪之吉、中村清太郎、石井鶴三など著名な山岳画家たちが結成してから六十二年の伝統を持つこの協会に属し、自分なりの境地を探り離れていった山岳画家たちのなかにも、この会から何らかの影響を受けた人は多いことだろう。

セレモニーのあとの小宴会で、大町山岳博物館友の会の代表者は、山岳画協会員の絵が交代で、一点でも二点でも常設で展示されるスペースが確保できるようにして欲しい、とコメントしていたが、エベレストでさえ年間数えきれないほど登頂者がいる現在、山に関わる芸術家の高い人間精神の表現の場が確保されてこそ、山の世界にも、年老いて果てるまでの人間の居場所が見えてくるのではなからうかと、このオープニング・セレモニーの後、駅前通りにある小さな画廊で開かれていた山川勇一郎絵画展に並ぶ、同氏の六十四点もの作品を眺めながら思い、大町を後にした。

心の連衆

石岡慎介

大っきな空の下。富士の裾野に集まった登山愛好家ら七十名。

五月末、カラマツ、モミの芽吹きの際に、裾野市山岳会と日本山岳会との、初めての合同散策会が富士山須山登山歩道で開かれた。六十年も昔、静かで緑豊かな富士山南面の勝地を「須山の岳友」と歩き回っていた小島鳥水氏や冠松次郎氏の山岳会先人が

「おっ！ 君たちも一緒に歩いていくかね」

とはるか天空から微笑みかけているような巡り合いの不思議さと尊さ……。

思い起こすと、昨秋「須山の友」勝又氏と出会ってから半年、市民の力で八十五年ぶりに復活した登山道の散策を呼びかけたのが、四月号の会報紙上であった。そして、95同期会の七名が中心となり、集会委員会の支持を得て、静岡支部の皆さんと一緒に約四十名が参加し、地元の方々と交流を深めることになった。

地元の登山愛好者、市長はじめ行政の方々の反響も日増しに大きくなり、幹事一同嬉しさとともに、大きさに戸惑う連続であった。

山岳会の斎藤会長、小倉副会長にも一方ならぬご尽力をいただいた。古人の交流が今という時代の「いのち」の通い合いとして伝わってくる幸せを感じられた参加者も多かったと思う。

登山前日、須山農民研修センターは今年九十八歳になられた元日本山岳会会員渡辺徳逸先生の講話を拝聴しようとする市役所幹部、裾野市民の熱気でムンムンとしていた。古人の情熱をしっかりと継承しておられる地元の方皆さん百五十名のなかで本会参加者が起立して紹介された。

俳句

赤牛岳山行

広渡敬雄

緑蔭のなかに緑蔭ワングルボ

駒草や砂礫の海に浮くごとし

山荘に一番星と夏炬かな

雪田を隔てしヒュッテ灯りけり

人工衛星と小舎番の指す星月夜

山小舎の灯の消えてより汗の香か

ご来迎連山色を失へり

朝焼けのカールが三つ薬師岳

雪溪の緊まりスプーンカットかな

羚羊の攀ぢりて落とす脚の雪

二重山稜のにはたづみより黒揚羽

悪声といへば雷鳥思ひけり

今年もさげんで会いましょう

小島初代会長の推挙で昭和十四年日本山岳会会員になられた渡辺翁は「須山登山歩道の歴史と出会った人々」と題して、三十代からの研究話や思い出を抜群の記憶力でたどられた。俳人の故永田耕衣の好きな「今日は私の今日にあらず、大家の今日なり」の風格であった。故郷須山で富士に懐かれ、廃道復活と水源探査に理想を掲げ、自然破壊に立ち向かう、実践を通して生き貫いてこられたエネルギーは感嘆するばかりであった。

斎藤会長が揮毫された尾崎喜八の「山に祈る」の詩が静岡支部の安間前支部長から渡辺翁に贈られた。翁の喜びは明治四十四年発行の小島鳥水著「日本アルプス第二巻」の須山口登山案内「笠雲の富士」にその源流があったのだ。曰く、「ほんたうに自然を楽しみ、又は、研究しようとするには、お祭り騒ぎの賑やか路よりも、却つて、須山口のやうな、誰も登らない、静かで、自然美に富んだ土地に興味を持つであらう、そこで私は、この須山口から富士山に登った御話をしませう」である。その夜「大野路」の晩餐会はもは

や台本の必要もない参加者の心響き合う自然体でよかった。富士山麓の文化を大切にされる大橋市長のご挨拶にはじまり、日本山岳会信濃支部長だった尾崎喜八の人生の詩心を述べられた小倉副会長、病む富士に凜と向き合う重廣先輩のメッセージなど、宴も心地よく進んだ。

いよいよ散策だ。凱風快晴。六班に分かれ、地元山岳会の方々が各班リーダーを務めてくれた。次から次へと出会う花や草、野鳥の囁り、登山歩道に精通した地元の方々「オラが散策歩道」の誇りを美しく語ってくれた。地元の加藤さんによれば、五十種類近い草花のなかで花をつけていたものの中には、ニリンソウ、シロガネソウ、クワガタソウ、タンギキキョウ、マイズルソウ、ヤマシヤクヤク、ツバメオモト、ギンラン、イチヨウラン、シロバナヘビイチゴ、チャルメラソウ、イチヤクソウ、イワツゲクサ、フジハタザオなどなど。チュルチュルと囁るメボソムシクイ、ミソサザイ、クロツグミ、コゲラ、ヒガラ、コルリなど、鳥の声を聞きわけてくれた滝さん。自然派の共生に仲間入りだ。

やがて、九六年九月の二二号台風で完膚なきまでにやられたブナ、ミズナラ、ウラジオモミなどの自然林の惨状に圧倒された。倒れたまま苔

むして腐っていく命だ。小休止してよく見ると、もうすでに倒木に小さな命が朝の光にきらめいているではないか！ 倒木更新だ。晩年の幸田文が感動した自然と生命の摂理を思い起こす。程なく、海拔二一〇〇メートルの渡辺翁が命名されたと聞く御殿庭中に着く。宝永の噴火によってできた台地上の広大な斜面で、カラマツ、モミの滴るような緑と美しい巨石は山岳庭園となっていて人心和らぐところだ。ここには修験者の修行跡も残っているが、そういえば、奈良時代からの信仰のお山が江戸時代に全盛の富士講へと翁の講話も及んでいた。

コンパスグラス HB-3

広視野10°の明るい視野に目盛が重なって見えます。見た目標がそのまま正しい磁気方位です。




重量78g.

つや消し黒	¥17,000	送料 ¥ 600
実色メタリック	¥18,000	消費税別

カタログ代無料、電話、FAX、葉書でどうぞ
〒117 東京都練馬区上石神井1丁目37番13号
株式会社 石神井計器製作所 TEL 03-3928-5411 FAX 03-3928-5411

図書紹介



★紹介図書は全て税別価格です

日本山岳会富山支部・編

【山岳】

—創立50周年記念誌—

支部長木戸繁良氏以下現支部会員数七十四名、こぢんまりした仲間の五十年史である。大規模な海外遠征などの派手な活動はないが、地元富山ならではの立場で、日本山岳会本部や他の関係諸団体との共催事業への積極的な協力姿勢がうかがえる。たとえばHATJ富山会議への協力、自然保護協会との共催による播隆祭の開催などなど。

山岳史的な観点からの興味で記事を拾えば、石坂久忠「偉聖・播隆上人」(年譜付き)、井上晃「池の谷の初登頂」、若林啓之助「諏訪多文庫のこと」、廣瀬誠「立山黒部と我が若き日の思い出」などがある。

(越田和男)

一九九八年三月 日本山岳会富山支部発行 一六〇ページ 非売品

タイム・マッカートニー・スネイフ・著
海津正彦・訳

【エヴェレストへの長い道
—海拔ゼロから頂上へ—】

原題は「EVEREST from Sea to Summit」。著者は一九五六年生まれのオーストラリア最初のエベレスト登頂者(八四年十月、北壁経由、無酸素)である。

本書は一九九〇年二月〜六月にかけて「エヴェレスト山頂に舞い下りた雪片のたどるコースを逆方向から追って、生命の生まれ故郷である海から出発して世界の最高峰まで続く、このささやかな旅は生命の寓話なのだ」。

生涯に際立った印象的な日―八四年十月三日のエベレスト初登頂を再録する。「八八四八メートルを登ったといっても途中からで、誰も海拔ゼロからはじめてはいない」というカメラマンの言葉から「海から頂上遠征隊」構想が浮かび上がったと明かしている。

ガンジス河口を二月五日に出発。混沌と悠久の大平野は興味をそそる多くの活動があり、それを吸収する

には歩くこと、と四十五日間歩き続け、三月三十日ディンボチェの高さで中間点の一〇〇キロ、四五〇〇メートル登った。ネパール山麓地帯の新鮮さは強烈で、本質的な想いが起こる。登頂ルートは初め西稜―頂上―サウスコルの単独縦走を試みるが、西稜肩上で断念。サウスコルC3からの単独無酸素往復登頂を果たしている。この気宇壮大な計画を気負いもなく消化していくエネルギーはすごい。

なお巻末の付①考え方②装備と食料は参考になる。(三沢 一三)

一九九八年三月 山と溪谷社発行
三一六ページ 二千四百円

Edited by Nicholas and Nina Shoumatoff

【Around the Roof of the World】

「世界の屋根を巡る」と題されたこの本は、パミールとトランス・アライを中心とする地域の山岳地帯を舞台として、九人のロシア人による二十編にアメリカ人筆者の三編を加えた報告文集である。この地域の風俗文化、自然を語る準学術的記述と並んで、コミュニケーション峰南壁初登頂など注目すべき登行記録が初めて英語訳されている。

フは元電気技師の昆虫学者、その妻ニーナは文学と哲学を学んだ人であって、この二人の編による書物は文化と自然と登山を一望のもとに繰り広げると同時に、中央アジアでのロシア人の登山活動の一端を垣間見せる。(宮下啓三)

Michigan, USA 一九九六年
二二七ページ

村西博次・編著

【和仏山岳用語研究】

先年出版された『仏和山岳用語集』の姉妹編。前書の時、感謝と敬意を持ったが、こんどのはそれにもましてありがたい。言葉の勉強に必須の仏和辞典は数多く、すぐれた内容のものがあるが、それにくらべると、和仏のほうは、いま一つという不満が残る。そんななかでのこの日本語→フランス語の仕事は貴重。山岳関係の言葉は、一般の辞書では探し出せないことがあり、たとえばantécime(前衛峰)という言葉がのっている。仏和辞書は多くない。山岳用語にしばって日本語と往来できる辞書は、英語、独語、中国語などでもないはずだから、この労作はいっそうよろこばしい。

「辞書」とせずに「用語集」、こんど和仏が「用語研究」というのも

おくゆかしい。山スキーやフリーク
ライミングの用語も収録されていて、
英語など他の言葉の分野にも十分参
考になる。

京都府山岳連盟の仏語訳があつて
他の都道府県のそれがないのは、京
都人の郷土愛? いや、一つのせる
からは応用せよという親心であろ
う。

一九九八年四月 京都山の会出版
局発行 ナカニシヤ出版発売 二
七〇ページ 三千円 (大森久雄)

横山厚夫・著

『山の山』ある山の峠

低登山家とは何であろうかという
疑問よりも、本題の『ある日の山
ある日の峠』がまさしくありのまま
純に飛び込んできた。一月より十二
月までこんな素晴らしい山峠があつ
たのかと自分を疑いたくなるような
気持ちで読破した。いつも奥様と、
ある時には親しい仲間と、時には頂
より眺めた山々を次の山行へと、汲
めど尽きぬ熱き想いを持ち、自然を
追い求める姿に感動させられた。著
者は言う。他人が百名山狂であるう
と、一等三角点狂であろうと、端か
らとやかく言う筋合いはないし、そ
れに一つの目的を定めて登るのも立
派な山登りの方法である、と。

私はこんなところにこの本の魅力
があると同時に、一つの目的を持っ
て山を登っている人々に薦めたい本
である。 (藤井昭孝)

一九九八年三月 白山書房発行
二二九ページ 千七百円

根深 誠・著

『北の山里に生きる』

―みちのくの自然と人生―

北奥羽地方の山里に取材したルポ
である。

「山暮らしの四季」「北に生きる人
々」「変わる村と暮らし」「北の自然
を見守る」の四章から構成されてい
る。

前半は山里の自然と関わって生き
る人々たちを、その豊かな自然を背景
に紹介している。テーマをあげると
春マタギ、イワナのタタキ、木出し
山、ウサギ狩、山の暮らし、ある炭
焼き夫婦の一日、地竹細工の村、浄
法寺の搔子、鍛冶・軽米源光、十和
田湖仙人など、古くから厳しい自然
の中で生業を営むありさまや知恵が
生き生きとつづられている。

これらは近代化の中でやがて失わ
れたり、形を変えていくものもある
であろうが、北奥羽地方の貴重な民
俗誌ともなっている。

後半は開発や近代化によって荒廃

していく集落や、古くからの伝統行
事を紹介し、最後に地道に自然保護
を続けている人に触れている。

獅子舞の主役や神事を司る宮司が
女性に代わっても、山里の伝統をな
お守っていることとするその活力は、
添えられた写真とともに読者の感動
を呼ぶことであろう。

著者は早くより白神山地に入り、
その保護を訴え続けてきたことで知
られている。土着(弘前市在住)の
人だけにその取材内容に具体性があ
り、かつ記述内容が土俗性に富んで
いることで一層迫力がある。山里の
豊かな文化を絶やしてはならないと
いう著者のひたむきな熱意が伝わっ
てくる好著である。 (松家 晋)

一九九八年四月 実業之日本社発
行 二二三ページ 千七百円

平山善吉・著

『エベレスト遥かなり』

著者は、日本大学山岳部OBで、
日本極地研究振興会理事、日本建築
学会副会長、日本山岳会常任評議員
日本大学体育会山岳部長、工学博士
である。

本文は、エベレストへの遠い道、
登山隊の発足、ベ이스キャンプへ、
ベ이스キャンプの建設、高所順応と
ルート工作、登頂、エベレストをあ

とに、の七章で構成されている。
憧れの日大に入学し山岳部に入部。
先輩の初見一雄さんに影響を受け、
そのお陰があつて第一次から通算四
回の南極隊に参加したこと。山岳部
創立七十周年記念登山は、なぜエベ
レストだったのか。なぜ北東稜でな
ければならなかったのか。総隊長と
して、戦略と実戦が見事の中、五
月十一日に登頂成功。気象と医療を
登山の支援要素とした科学的登山の
勝利であった、などが生き生きと書
かれている。 (中村太郎)

一九九八年五月 悠々社発行 三
五二ページ 三千五百円

NZの植物研究家リチャード・ライアルさんと歩く

ニュージーランド花の山旅

●1998年12月6日(日)~12月13日(日) 8日間
●東京(成田)発着 418,000円

運輸大臣登録旅行業第490号/日本旅行業協会正会員

アパリアツサービス株式会社

〒105-0003 港区西新橋1-12-1(西新橋1森ビル) TEL.03-3503-1911
大阪☎06(444)3033 名古屋☎052(581)3211 福岡☎092(715)1557

故片山全平氏の蔵書450冊 寄贈される

故片山全平氏(会員番号3997)は、1976~84年、会報の『海外情報』『海外の山』などの欄を執筆されていたので、ご存知の会員も多いと思います。このたび故人の山関係の蔵書をご遺族のご厚意により、本会にご寄贈いただきました。本部図書室と上

高地山研で閲覧に供します。以下は寄贈書450冊の一部です。一覧は図書室にありますので、ご希望の方は図書係へご連絡ください。

本部図書室寄贈分

- | | |
|--------------|-------|
| 1. 単独行 | 加藤文太郎 |
| 2. 山に描く | 足立源一郎 |
| 3. わが山旅 | 田淵 行男 |
| 4. 山頂の憩い | 深田 久弥 |
| 5. 孤高の人(上・下) | 新田 次郎 |
| 6. 屋上登攀者 | 藤木 九三 |
| 7. 西域をゆく | 井上靖・他 |
| 8. 山岳遭難 | 小島 六郎 |
| 9. シャモニの休日 | 近藤 等 |

10. はるかなる天山 セミヨーノフ
(他 和書94冊 洋書64冊)

上高地山研寄贈分

- | | |
|--------------|---------|
| 1. 山への思慕 | 田部 重治 |
| 2. 先蹤者 | 大島 亮吉 |
| 3. 山・原野・牧場 | 坂本 直行 |
| 4. 穂高岳 | 諏訪多栄蔵 |
| 5. 父と子の山 | 松方 三郎 |
| 6. 穂高星夜 | 山崎 安治 |
| 7. 山と書物 | 小林 義正 |
| 8. 岩壁よおはよう | 長谷川恒男 |
| 9. わが山々へ | W・ボナッティ |
| 10. エヴェレストの東 | E・ヒラリー |
- (他 和書170冊 洋書108冊)

中国雪峰地区の受入報告 図書室

西安地図出版社(Xi'an Cartographic Publishing House)は、かねてより、中国科学院蘭州水河凍土沙漠研究所(Lanzhou Institute of Glaciology and Geocryology, Chinese Academy of Sciences)とタイアップして、中国の高峰水河地図や中国雪峰の登山地図(The Map of Snow Mountains in China)のシリーズ地図を出版してきましたが、1997年には、この Snow Mountain mapの10万分の1地図

のシリーズとして、カイルス、ナムナニ、ナムチャバルワ、ノジンカンサンなどの地図を相次いで出版した。

本会では、これら地図の日本での総発売元である中国地図研究会代表の渡辺義一郎氏(本会会員)を通じて8種類のこのシリーズの地図、他にボゴダおよび祁連山脈氷河地図を購入した。その際渡辺氏のご厚意により、本会図書室宛別紙リストのとおり、バツラ氷河の6万分の1地形図、ミニアコンガの2万5千分の1氷河地形図、新疆ウイグル自治区のケリヤ河流域景観図を含む計14枚の地図の寄贈を受けた。

なお渡辺義一郎氏(会員番号7871)は、1973年以来、当時未開放であった中国の奥地や辺境で登山の実現に取り組み、1981年には初登頂のアム

ネマチン峰登山隊副隊長、1987年には梅里雪山登山隊長として参加された。今回提供いただいたこれらの地図は、購入分も含め図書室のマップ・ロッカーに保管することにした。

今回調達した地図類は、神田神保町の東方書店(電話・03-3294-1001)で購入できる。

- ・The Map of Snow Mountain シリーズ地図
 - 1991年発行チョモランマ地図……… 1,000円
 - 1994発行K2等3種……… 2,000円
 - 1997年発行前記4種……… 2,200円
 - ・祁連山脈氷河地図(2枚1組、1993年)……… 5,000円
 - ・ボゴダ連峰氷河地形図(1983年)……… 2,000円
- (Y・M)

中国雪峰氷河地区の受入リスト

地図名	縮尺	発行年
1. Mt. Qomolangma (チョモランマ:珠穆朗瑪峰)	1:100,000	1991
2. Mt. Xixiangma (シシャパンマ:希夏邦馬峰)	1:100,000	1994
3. Kongur Tagh-Muztag Ata (コングール〜ムスターグアタ:公格爾山〜慕士塔格)	1:100,000	1994
4. K2 (Mt. Qogori)	1:100,000	1994
5. Kangrinboqe (カイルス:カンリンボチェ)	1:100,000	1997
6. Naimona'nyi (ナムナニ:納木那尼)	1:100,000	1997
7. Namjagbarwa (ナムチャバルワ:南迦巴瓦)	1:100,000	1997
8. Noiinkangsang (ノジンカンサン:寧金崗桑)	1: 50,000	1997
9. Glacial Topographic Map of Mt. Bogda Region (天山ボゴダ:博格達峰地区氷河地形図)	1: 50,000	1983
10. Map of Peaks & Glaciers in Qilian Mountains (祁連山山脈山峰氷河分布図)2枚組 * 2枚組のうち1枚には次の5峰が収容されている	1:700,000	1993
①Qilian(祁連山) ②Daxue(大雪山) ③Lenglong(冷龍嶺) ④Danghes(党河南山) ⑤Sules(疏勒南山)	1:250,000	1993
11. The Map of Batura Glacier (バツラ:巴托拉氷河図)	1: 60,000	1978
12. The Map of Glaciers of Mt. Gongga (ミニヤコンガ:貢嘎山水河図)	1: 25,000	1985
13. Map of Landscape of Keriya River Xinjiang Uygur Autonomous Region (新疆維吾爾自治區ケリヤ〜克里雅〜河流域景観図)	1:400,000	1988

ネパール国際山岳博物館募金応募状況

表記の募金にご協力くださった方々のご芳名を掲載し、お礼に替えさせていただきます。(敬称略)

42名 121口 607,000円 (8月7日現在) 累計804名 2,258口 11,306,517円

- | | | |
|---------------------------------|---------------------------------|-------------------------------|
| ●20口 (100,000円)
東京慈恵会医科大学山の会 | 小泉武榮 中川尚 百田高子
菅靖夫 山本正嘉 田中弘美 | 亀井秀子 四手井靖彦 中世古
隆司 若松庄三 玉虫誠 |
| ●10口 (50,000円)
平林克敏 | 井上博 伊藤一弘 山浦源太郎 | ●1口 (5,000円)
中島宏 田立泰彦 瓜生幹夫 |
| ●6口 (30,000円)
寺田和雄 山想会 神崎忠男 | 梅野淑子 遠藤昭治 副島勝人
塩澤厚 嶋原一男 井口謙司 | 伊藤博夫 中原剛 |
| ●4口 (20,000円)
古屋学而 大蔵喜福 | 三谷統一郎 東京慈恵会医科大学山岳部 宮川清明・ふみ江 | ●その他口 (12,000円)
小坂正男 |
| ●2口 (10,000円) | 大久保泰司 重村清 糸原学
藤岡知昭 神長幹雄 古瀬浩介 | |

書籍受入報告 (1998年7月)

著者	書名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入
ヒマラヤ保全協会(編)	NGOによるネパール山村の参画型開発と環境・文化保全 : アンナプルナ総合環境保全プロジェクト評価報告	241pp/30cm	ヒマラヤ保全協会	1998	発行者寄贈
串田孫一 他(編)	大雪山(日本の名山 第1巻)	252pp/20cm	博品社	1998	出版社寄贈
寺林峻	富士の強力: 小俣彦太郎伝	255pp/20cm	東京新聞出版局	1998	出版社寄贈
会津百名山リストアップ委員会他	会津百名山ガイド	219pp/22cm	歴史春秋出版	1998	著者寄贈
富山県山岳連盟(編)	太刀の嶺高く: 富山県山岳連盟創立50周年記念誌	171pp/26cm	富山県山岳連盟	1998	発行者寄贈
新井信太郎 他	雲取山の歩き方: 新井信太郎と9人の仲間が選んだ26コース	215pp/20cm	けやき出版	1998	著者寄贈
守屋龍男	多摩の低山: 埋もれた道・懐しい道 38コース	238pp/19cm	けやき出版	1995	著者寄贈
守屋龍男	秩父の低山: 奥武蔵・比企・秩父 41コース	241pp/19cm	けやき出版	1994	著者寄贈
守屋龍男	相模の低山: 相模川上流の山々 34コース	246pp/19cm	けやき出版	1994	著者寄贈
守屋龍男	花の低山: 多摩・奥武蔵の山と丘陵 21コース	151pp/22cm	けやき出版	1998	著者寄贈
守屋龍男	東京周辺カタクリの森を訪ねて	106pp/22cm	守屋龍男(私家版)	1997	著者寄贈
松本深志高等学校山岳部(編)	松本深志高等学校山岳部創部80年記念誌	126pp/26cm	松本深志山岳部OB会	1998	発行者寄贈
千葉工業大学登山隊1995(編)	ナンガ・バルバット 1995: Keeping Tryst with Nanga Parbat	95pp/27cm	千葉工大山岳部OB会	1998	発行者寄贈
本の出版社(編)	登山・ハイキング・バス時刻表 [関東版・98年夏秋号]	511pp/19cm	書苑新社	1998	出版社寄贈
本の出版社(編)	登山・ハイキング・バス時刻表 [近畿版・98年夏秋号]	487pp/19cm	書苑新社	1998	出版社寄贈
山と溪谷社山岳図書編集部(編)	山歩きのための山名・用語事典 (アルペンガイド別冊)	264pp/19cm	山と溪谷社	1998	出版社寄贈
Anker, Daniel	Eiger: Die Vertikale Arena	288pp/25cm	AS Verlag	1998	宮下啓三氏寄贈
Nanavati, J. C.	A Study of Nyegi Kangsang Expedition 1995	42pp/35cm	The Himalayan Club	1998	著者寄贈
Merz, Johanna (ed.)	The Alpine Journal 1998 (Vol. 103, No. 347)	388pp/23cm	Ernest Press	1998	発行者寄贈

会務報告

七月理事会

日時 七月八日(水) 十八時三十分～

二十時四十分

場所 日本山岳協会議室

出席者 斎藤会長、小倉、大森、

竹内各副会長、吉永、田邊、伊丹、

熊崎、絹川、勝山、村井、鯨坂、増

山、森、大蔵、宇田川、宮崎、坂本

各理事、石橋監事、平山、穴田、中

川、平野、中村各常任評議員

〔委任〕飯田理事(カラコルム山群行

動中)、神崎監事、長尾常任評議員

【審議事項】

一、日中合同学生登山の件 伊丹

五月に斎藤会長一行が中国登山協

会(CMA)を敬訪問した際、CMA

李舒平氏より日中合同学生登山計

画が提案された。学生部としては本

年度ブータン・ヒマラヤ登山計画が

進行中なので、来年度(一九九九)よ

り計画実施を検討したい。継続審議

二、ネパールトレッキング 吉永

実施計画十コースを「山」七月号

に掲載。募集受付などは総務・海外

連絡・集各委員会および有志によ

る専任の実行委員会に対処。承認

三、事務局土曜日の取り扱い 絹川

現在事務局は祝祭日を除き月々土

まで六日間開室しているが、一般社
会では多くが土曜日休になっている。
理事会、総務委員会で検討した結果
以下のとおり試行を提案する。

①十月より月二回、第二、第四土曜

日を休日とし、ルームを開室。

②開室の第一、第三、第五土曜日は

閉室時間を十八時とする。

③八、九月号の「山」で広報し、会

員への徹底を図る。九月の全国支

部懇談会でも主旨説明をする。

④土曜会、オリエンテーションなど

の会務はできる限り第一、第三土

曜日にお願ひする。

⑤会員などからの不便さへの意見は

十分に検討する。

以上の結果をもって九九年度総会

に図ることにする。承認

四、ガンカー・プンスム(七五七〇・

四メートル)偵察計画の件 伊丹

高所登山研究委員会は未踏の最高

峰ガンカー・プンスム主峰(九九九

年度遠征計画)に偵察隊を派遣したい。

目的 ガンカー・プンスム峰同定、

アプローチルート解明 試登

期間 九八年十月中旬～十一月下旬

(約四十日)

偵察隊の構成

隊長・伊丹紹泰

登山隊長・山本篤

隊員・中村進 他二三名
(取材、映像チーム同行の可

能性あり)

登山隊の経費 読売新聞社、日本テ

レビ放送網などの資金助成を

得るべく鋭意努力する。承認

五、図書管理委員会 小倉副会長

保有図書は本会の重要な財産であ

り、総務または財務で管理すべきと

いう考え方もできる。図書管理委員

会の今後の在り方および事務の所管

などを考える小委員会を編成し、来

年二月をめどに検討したい。承認

六、名義後援、撮影、転載など承認

案件 絹川

①東京都山岳連盟会長より、第六回

日本山岳耐久レース「長谷川恒男

CUP」開催(十月十～十一日)

にあたり名義後援要請。

②(加賀市地域振興事業団理事長よ

り、第二回加賀市深田久弥「日本

百名山」写真コンテスト(十～十

一年)開催にあたり、後援名義使

用要請。

③富山県「立山博物館」館長より、

十年度特別企画展「山を撮る」(七

月二十五日～八月三十日)開催に、

当会収蔵資料六点の出展依頼要請。

④関西学院大学OB会より「山」六

月号「中高年者のためのトレニ

ング」転載許可願ひ。

⑤(株)平凡社「別冊太陽」編集長より、

九月二十五日発行の一〇三号「日

本山岳人物誌」(仮)に、中村清

太郎「初夏の槍ヶ岳」「田代池の
白樺」「雪渓長次郎谷」、茨木猪之
吉「針ノ木雪渓」「針ノ木峠より」
「初冬の両神山」、三田幸夫・遺品
(手紙、ノート)、冠松次郎・遺品
の写真掲載、撮影の許可願ひ。
以上五件承認

七、国連環境計画(UNEP)国際

環境情報源紹介システムへの新規登

録の件 絹川

環境庁国立環境研究所環境情報セ

ンター長より、右記システムへの新

規登録依頼が寄せられたが、対応を

自然保護委員会に委任したい。承認

【報告事項】

●トレッキング・小倉副会長

ヒマラヤ保全協会よりヒマラヤト

レッキングの会報による広報要請が

あったが、本会も十一月に計画があ

るため見送りとす。

●富士の古道を歩く・小倉副会長

五月三十、三十一日開催。小倉副

会長、勝山理事、前静岡支部長安間

会員が参加。富士山資料館・渡辺館

長の講演、裾野市長も謝辞を述べら

れ盛会裡に終了。

●総務委員会・絹川

①評議委員会開催 七月二十五日

②名誉会員を囲む会開催 八月五日

●秩父宮記念山岳賞・竹内副会長

七月十七日、関係者合同打ち合わ

せ会議を開催。

●第九次マッキンリー気象観測機器設置登山隊・大蔵
五月二十八日アンカレッジ、六月十三日機器設置および登頂(登頂者八名)、六月二十日帰国、解散。

●学生部・宮崎
ブータンヒマラヤ登山隊一九九八について、七月六日監督会議を開催目標登山峰の再検討を含め、新たな意識で実施の準備を進め、九月の理事会に報告する。

●集委員会・勝山
第一回同好会、同期会連絡会議
①六月二十六日開催。今後も連絡の場を持つ。

②ルームおよび備品使用事務連絡。
③同好会、同期会の活動予定、活動報告取りまとめの窓口は集委員会理事とする。ただし従来他委員会を経て予定報告のある同好会は従来どおりとする。

④年間行事予定の調整。
中高年対策に関する行事「夏山を満喫するため」

10月より(試行)
第2、第4土曜日
ルームを閉めます。

上記以外の日は
従来どおりです

総務委員会

①第一回 メディカルチェックのす
すめ 六月十二日 本会会議室
講師 大森副会長 参加者二十四名

②第二回 筋力アップとストレッチ
ング 六月二十一日 法政大学体
育館 講師・石見インストラクタ
ー 参加者十七名
以上の企画で参加者が少なかった
ので、今後については考慮中。会報
「山」六月号を会員が自身の問題とし
て受け止めてくれることを期待する。

●山岳研究所運営委員会・坂本
①上高地山研の小型水力発電設置計
画案の説明。
②八月二日(二十三日開催の自然エ
ネルギー展終了後、上高地ビジ
ターセンターより継続展示の申し
入れがあり、九月、十月にわたり
同所での展示が行われる予定。

●青年部・宇田川
カンチエングンガ登山隊は、故
赤坂謙三、椎名厚史両君の報告、追
悼会が七月十一日、スクワール麴町
で開かれた。

●財務委員会・吉永
①事務局OAコンピュータ契約は
平成十一年一月納入予定とし、現
機種と並行使用を経て二〇〇〇年
四月より専用とする。その間メー
カーとの対応はチーフ一名、サブ
二名編成でスムーズな運用を図る。
②現在会費は五千五百万円の入金、

納入率六七・四パーセント。新入
会員も百二十名が納入済み。

●全国支部懇談会・絹川

主管 秋田支部
日時 九月十九、二十日
場所 男鹿市北浦門前・磯乃家旅館
参加費 一万三千元(宿泊費を含む)
申込 九月一日までに 岡田光行宛
秋田市保戸野中町七一四
懇親登山 九月二十日 男鹿三山

■会員異動
高橋 治(一一六四九) 10・6・23
戸嶋平八(一〇二二二) 10・7・11
退会 10・7・31
近田文弘(九六五五)
畠山愛明(二二二五九)
谷 久光(五六〇〇)
石川恵子(一〇四三三)
中野善壽(一〇六六〇)
終身会員
大谷一良(四五八八)
谷川菊雄(四八一三)
佐藤 勉(六五九六)

ル
ー
ム
日
誌

7月

2日 常務理事会 山学研 学生部
3日 フォトビデオクラブ 会報編
集委員会

集委員会

6日 総務委員会 学生部
7日 アルパインスケッチクラブ
二火会

8日 理事会 93同期会 95同期会
学生部
9日 海外連絡委員会 青年部・学
生部前期納会

10日 95同期会 自然保護委員会
13日 アルパインスキークラブ 資
料委員会
14日 百年史委員会 フィルムビデ
オ委員会 アルパインスケッ
チクラブ PC導入委員会

15日 三水会 学生部 山研運営委
員会 海外連絡委員会
16日 科学委員会 学生部 海外連
絡委員会
17日 秩父宮記念山岳賞運営委員会
海外連絡委員会

21日 自然保護委員会 97同期会
22日 学生部 海外連絡委員会
23日 学生部 アルパインスキー
クラブ
24日 青年部
25日 評議員会
27日 図書委員会
28日 自然保護委員会 データバン
ク研究会 二火会 山岳編集
委員会

30日 トレッキング実行委員会 学
生部
7月来室者675名

INFORMATION



◆第六回「山を語る」 図書委員会

自らのチョゴリザ登頂をはじめ、サルトロカンリ、シエルピカンリ、クーラカンリなど、いずれも初登頂の榮譽をにたった遠征隊に参加された講師が、スライドを用いて語る、四十一年ぶりのチョゴリザ。ふるってご参加ください。

日時 十月十六日(金) 十八時三十分
場所 日本山岳会ルーム
演題 四十年ぶりのチョゴリザ
講師 平井一正氏

◆岩登り技術研修会開催

指導委員会・遭難対策委員会

本研修会は文部省登山研修所に設備されているコンピューターと連動した衝撃荷重測定器(ロードセル)を用いての制動確保技術訓練を中心に、国内屈指の規模を誇る屋内外の人口壁を利用しての訓練など、岩登りのための総合的な技術習得を目的としたものです。

クライミングに関心のある会員、

とくに大学山岳部や社会人山岳会などで指導的な立場にある方には大変有意義な研修会です。初心者でも意欲旺盛な方なら参加を受け付けます。

日時 十月二十三日(金)～二十五日(日)
場所 文部省登山研修所(富山県)

内容 ①制動確保に関する理論講義と実技訓練
②トータルプロテクションシステムの構築と実践
③スポーツクライミング実技とクライミングのためのトレーニングについての講習
④岩場における救助技術研修
⑤講演「剣岳における山岳遭難救助」

⑥その他
講師 柳沢昭夫(登山研修所所長)
相田 正(富山県警察山岳警備隊副隊長)
田正氏
『ナンガパルバット・ディアミール壁ソロクライミング』指導委員会委員・棚橋靖氏

参加費 二万五千円程度(宿泊費、食費などを含む・学割あり)
※詳細要項をご希望の方は官製ハガキ

キでご連絡ください。資料・申し込み用紙一式を送付します。

宛先 熊崎和宏(〒一八〇〇〇〇〇)
一 武蔵野市吉祥寺北町三一
五―二四―三〇二)

◆一九九八年度自然保護全国集会

京都支部の協力で開催します。二日目は普段なかなか入ることのできない原生林の核心部を歩きます。

日時 十一月十四日(土)～十五日(日)
会場 京都府美山町・河鹿荘

内容(十四日)
①芦生演習林について
②世界遺産について
③各支部報告

(十五日)
芦生の森(京都大学芦生演習林)探索費用 一万円(予定)
申込 川越尚子宛 十月十五日までにハガキで 〒一八五〇〇〇
一一 国分寺市本多三―七―三二)

※申込者に詳細を直接連絡します。
◆早池峰の昔の高山植物の写真を探しています 自然保護委員会

早池峰は、近年ハヤチネウスユキソウが咲く頃に訪れる入山者が増えて、植生破壊が進んでいます。そこで、植生の変化の状況を比較するために、昔(できれば昭和四十年以前)の高山植物帯の写真を探しています。

お持ちの方は自然保護委員会までご連絡くださるようお願いいたします。

◆シンポジウム「科学的に捕らえた中・高年登山」 集会委員会

中・高年登山者が心がけるべき事柄に関するシンポジウムです。

日時 十一月二十八日(土) 十三時三十分

場所 明治大学大学院講堂
講師 大森薫雄氏(神奈川県立厚木病院 長 本会副会長)
高橋勝美氏(神奈川工大助教授)
山本正嘉氏(鹿屋体育大学助教授)

※詳細は次号でお知らせします。
◆第四回伊吹山播隆祭 東海支部
伊吹山の南側、滋賀県には播隆上人の遺跡、足跡が数多くあります。山東町はいわゆる「みたらし文書」の舞台となった場所です。播隆上人の歩いた道をたどり、思いをはせるシンポジウムを計画しました。

日時 十一月二十八日(土)～二十九日(日)
集合 二十八日 JR近江長岡駅 九時三十分
コース ①伊吹山麓寺 ②伊吹山頂 宿泊 山東グリーンハウス
シンポジウム「近江での播隆上人」
二十九日十時 他
費用 一万円(含一九九九年の昼食)
申込 播隆祭準備委員会 稲葉省吾

費用 一万円(含一九九九年の昼食)
申込 播隆祭準備委員会 稲葉省吾

ワルテル・ボナッティ氏初来日記念講演会

Walter Bonatti 初登記録：グラン・カピュサン東壁、ドリュ南西岩稜単独、ブトレイ大岩壁（後に北壁も）、ガッシュブルムIV峰、グランドジョラス北壁、ウォーカー稜冬期&ウィンパー稜側壁、マッターホルン北壁冬期単独（ダイレクトルート開拓）など。

このたび日本山岳会が究極登山(1950～60年代)の先駆者のひとり、イタリアが生んだ不世出の登山家ボナッティ氏（1930年生まれ）を招聘。映画にもなった遭難事故フレネイ中央岩稜の大悲劇でも広く知られる氏の講演会を大阪と東京の2ヵ所で行う。

日本の登山界全体に貢献するべく、広く多くの方にボナッティ氏の講演を聞いてもらうため当会の会員に限らず一般にも公開。夫人のロッサナ・ボデスタさん（「トロイのヘレン」で一世を風靡した女優）も同行予定。両講演とも当日はボナッティ氏著「大なる山の日々」（白水社/1,300円）を用意する。問い合わせはJAC事務局まで。

◆大阪講演会（JAC関西支部）
重廣恒夫氏をインタビューアーに迎え、スライドを交えて講演。
日時 9月25日(金) 18時30分～20時30分
場所 毎日新聞オーバルホール（JR大阪駅を西へ10分）
入場無料

◆東京講演会
「10月3日（登山の日）を国民の祝日に！」が合い言葉のイベント「登山の日のつどい」の第2部で、スライドを交えて講演。
●第1部は白旗史朗氏の講演。
日時 10月3日(土) 13時30分～16時
場所 杉並公会堂（JR荻窪駅より10分、青梅街道沿い）
入場料 500円

TEL&FAX・〇五八四―二七―七二四七
◆フィルムビデオ委員会近況
山岳関係ビデオライブラリーの充実を目指して、現在百八十本余りをラインアップ。山行などのビデオワークに比べ、8ミリデッキも設置、会員の利用を期待しています。
今年度は、冠松次郎氏の写真原板（白黒ネガ）をはじめ昔日の貴重な写真を保存し、検索のためにビデオ化するのを検討しています。

委員長・羽田栄治

◆アルパインフォトビデオクラブ
発足以来七年目、会員数も百名近くに、各々写欲満々。毎月例会を開催し、作品講演会や年二回の撮影会を行っています。
十一月には恒例の写真展、今年で六回目を迎えます。終了後、支部関係の施設などの巡回展をはじめ、来年五月には日本・ギリシャ修好百年にちなみ、アテネで日本の山岳自然紹介の写真展を開催する予定です。
◆秋の鈴鹿御在所岳散策・懇親山行

94同期会(93・95同期会協賛)
日時 十一月七日(土)～八日(日)
場所 鈴鹿御在所岳（ロープウェイと国見尾根より岩稜の風景を満喫した後、藤内壁に至り、周囲の景観を楽しみます。）
集合 七日十八時 御在所山の家（十七時三十分湯ノ山温泉バス停より案内します）
八日 九時ロープウェイ乗り場（自由参加）
申込 宿泊希望者のみハガキに「日本山岳会懇親山行十一月七日宿泊申込」と記し、直接「御在所山の家（〒五一〇〇一二三三）三重県三重郡菟野町湯ノ山一の谷 TEL・〇五九三―九二―二六五四」へ。

ある方、是非ご連絡ください。
栗林一路（〒一五八―〇〇八三）世田谷区奥沢三―一四―一五 TEL・〇三―三七二―〇一三五四五
◆第七回ネパール山岳エコロジースクールへ体感！
エコロジーライフ・イン・ヒマラヤヒマラヤ保全協会
日時 九八年十二月二十日～九九年一月六日
場所 ネパール アンナプルナ山麓
内容 ヒマラヤを臨むトレッキングの後、ネパールの山村にホームステイし、村人とともに農作業体験や、村の伝統文化の取材・記録などを行い、開発と環境・文化保全について考えます。
予備 三十三万円（当協会員以外は年会費七千円が必要）
締切 十一月十九日
申込・問合せ ヒマラヤ保全協会 TEL・〇三―三五五―〇一八四五八

◆ミニアコンカ翻訳訳話 二火会
ミニアコンカ翻訳の経緯をうかがいます。是非お出かけください。
日時 十月十三日 十八時三十分
場所 山岳会ルーム
講師 山本健一郎会員
会費 五百円
◆岩切岑泰個展
ヒマラヤ・アルプスなどの絵を中心に、油彩画三十点を展示します。
日時 十月十九日(月)～二十五日(日)
会場 朝日アートギャラリー（銀座）
TEL・〇三―三五六―一六七―
◆クリスチャンで山岳信仰に関心の

日本山岳会会報 山 640 号
1998年（平成10年）9月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビュウハイツ四番町
TEL 東京 (03)3261-4433
FAX 東京 (03)3261-4441
発行者 斎藤惇生
編集人 村井 葵
印刷 株式会社 双陽社